

在宅リハビリテーションサービス導入判断ツール作成検討結果（概要）

H30.11～R2.3 在宅リハビリテーションサービス導入判断ツール作成委員会

現 状

課 題

対 策

<p>1 リハ専門職として在宅リハサービスの導入が遅れたと思った事例の有無 「よくいる・たまにいる」が65.0%</p> <p>2 介護支援専門員（以下、「CM」という）として在宅リハサービスの必要性の判断に悩むことの有無 「よくある・ある」が40.9%</p> <p>理由（自由筆記）</p> <ol style="list-style-type: none">1 本人・家族に利用希望がない2 生活行為の予後予測がつかない <p>3 CMとして在宅リハサービスの必要性を判断する理由</p> <ol style="list-style-type: none">1 在宅リハサービスを導入すると利用者の生活機能の維持・向上が期待できると判断した時2 在宅リハサービスを導入することで家族の介護負担が軽減できると判断した時 <p>4 CMとして、利用者の生活機能が「維持・向上する」と判断する理由（自由記載）</p> <ol style="list-style-type: none">1 位 他職種の意見（医師意見書、退院時カンファレンス、PT等の評価）2 位 本人のやる気3 位 疾患予後が良い <p>5 リハ専門職として、利用者の生活機能が「向上する」と判断する理由（自由記載）</p> <ol style="list-style-type: none">1 位 本人のやる気2 位 疾患予後が良い3 位 家族が協力的 <p>H31.3 在宅リハビリテーションサービス導入時実態調査</p>	<p>1 在宅リハサービスの導入が遅れ、重度化する利用者の存在 適時に在宅リハサービスが導入されず、廃用症候群や疾患の増悪に伴う二次障害により、生活行為の低下を来した事例が少なからずある</p> <p>2 在宅リハサービス導入判断には利用者の生活行為の予後予測が必要 生活行為の予後予測のしにくさが在宅リハサービス導入判断のしにくさに関係している。 経験豊富なCM及びリハ専門職が行う利用者の生活行為の予後予測の視点、特に生活行為の低下に至りやすい条件を見える化し、共有することが必要</p> <p>3 在宅リハサービスの必要性に係る、利用者・家族への説明責任への対応 利用者やその家族が在宅リハサービスの必要性を理解することでサービス導入が円滑に行われるよう、なぜ在宅リハサービスが必要となるのかが具体的に伝えることが必要</p> <p>4 利用者の抱える課題に応じた相談・連携先の明確化 利用者の抱える課題に応じた相談・連携先が具体的に分かること。利用者の抱える課題をサービス提供者と共有できることが必要</p>	<p>1 在宅リハビリテーションサービス導入判断ツールの作成</p> <p>(1) ねらい CMが行う在宅リハサービス導入の判断のサポート及び利用者を含めたサービスを提供する専門職全員が利用者の課題・目標を共有するためのコミュニケーションツールとしての役割を果たすこと</p> <p>(2) CMへ期待すること</p> <ol style="list-style-type: none">① ケアマネジメントにおけるアセスメント時のツール活用② 他機関・他職種との連絡相談③ 利用者の目標達成のためのサービス間連携 <p>(2) リハ専門職へ期待すること</p> <ol style="list-style-type: none">① ツールを活用したCMからの情報提供を踏まえたリハビリテーションの実施② 利用者の目標達成のためのサービス間連携（通所介護、住民運営の通いの場活用） <p>2 在宅リハビリテーションサービス導入判断ツール活用促進</p> <p>(1) 在宅リハビリテーションサービス導入判断ツールの活用促進</p> <ol style="list-style-type: none">① 市町担当課を介した介護支援専門員への活用促進② リハビリテーション専門職への普及啓発・活用促進③ 通所介護事業所や訪問看護ステーションに勤務する看護師への普及啓発④ 但馬長寿の郷 ホームページ等を活用したツールの普及啓発 <p>(2) 在宅リハビリテーションサービス導入判断ツールの活用実態把握及びツール内容のブラッシュアップ 適宜、活用実態調査等を実施し、結果を踏まえたツールの内容等のブラッシュアップ等を関係職種と協働して実施</p>
--	--	--